

時と世代を越えて夏に集う ～五個荘川並町「納涼フェスティバル」～

五個荘川並町は、町内に特別養護老人ホーム清水苑と養護老人ホームきぬがさがあり、施設入居者を含めると人口755人、高齢化率約45.6%の自治会である。施設入居者を除くと人口643人、207世帯であり、高齢化率も約31.4%となる。「川並町納涼フェスティバル」は「きぬがさ会館」が1年中で一番賑わうイベントである。

1. 川並町納涼フェスティバル

8月の第一土曜日は、「川並町納涼フェスティバル」(以下、納涼フェス)が開催され、五個荘川並町(以下、川並町)の自治会館である「きぬがさ会館」が1年中で一番賑わう。

納涼フェスは、自治会長・福祉推進委員会会長を顧問に、副自治会長を会長とする町内の各種団体の代表者が参画する「住みよい川並づくり推進会議」が主催するイベントである。平成元年は納涼祭として、平成2年からは「川並町納涼フェスティバル」として開催しているイベントである。

特設ステージでは、幼稚園の子どもたちが歌を歌ったり、ギター演奏、マジックとバルーンアートが行われたりして賑やかに進行する。

会館隣の農組事務所と倉庫の前にずらりと「お楽しみ食べ歩き屋台店」が並ぶ。

昨年の屋台店は、フランクフルト、焼き鳥、焼きそば、みたらし団子、かき氷、飲み物であった。

特別養護老人ホーム清水苑と養護老人ホームきぬがさも、5年前から模擬店を出店している。ちなみに清水苑はカレーを、きぬがさは「タコせん」である。

会館向かいの「わんぱくゲーム広場」では、釣りゲームや輪投げ、射的が並び、子どもたちが楽しむ。

納涼フェスは1戸500円の寄付金と自治会の助成金、企業の寄付金、そして模擬店の売り上げを財源として運営されている。寄付をいただいた人に抽選券付きのプログラムが渡され、最



幼稚園の子どもたちのステージ



バルーンアートの様子



模擬店の様子



模擬店の様子

後に抽選会が行われる。一等は自転車、二等、三等は扇風機などである。抽選に外れた人も参加賞の洗剤などをいただける。

2. 活躍する「共同炊事場」

模擬店の準備では、「共同炊事場」が活躍する。きぬがさ会館の隣に建つ農組事務所内の共同炊事場で切り分けた食材は、町内の食品会社の冷蔵庫を借りて保存し、模擬店のジュースも冷やす。

共同炊事場は昭和30年代の前半に、農繁期に農組婦人部の方々が交代で夕飯のおかずをつくるために建てられたもので、昭和40年代の半ばまで活躍した。調理されたおかずは、世帯ごとに容器に入れられ、食べた後は洗って返しに行く。農業が機械化されてからはその役目を終え、今は、納涼フェスの「共同炊事場」として活躍している。

3. 変わりゆく川並の夏の風景と変わらないもの

納涼フェスがこの形になったのは平成に入ってからである。以前は、青年会主催で結神社や草の根広場に櫓を組んで盆踊りをしていた。昭和30年代には、福應寺の前にスクリーンを出して映画会が開かれていた。旧南小学校の講堂でも開かれていたという。

「夏の唯一のレクリエーションでした」と自

治会長の川島元信さんは話す。「夏の町内は賑やかでした」と副自治会長の吉川正之さんも懐かしむ。

夏は、自転車の荷台の木箱にアサヒ屋さんが「ボンボンキャンディ」を入れて、町内を売りに回る。川遊びをしていると自転車が通り、アイスクャンディを買って楽しんでいたそうだ。

夏に帰省した家族を含め約200人が集う納涼フェスは、今夏、コロナ禍で中止となった。

川島さんは「参加して楽しんでもくれる方がいる限り続けたい」と話す。

人の暮らしが変わり、町の姿も変わり、夏の風景も変わっていく。

しかし、変わらないものがある。それは、夏に町内みんなで集うこと。そして、その営みを続けようとする人たちがいることである。



ステージを楽しむ川並町の人たち